

## 福祉サービス提供に影響する要因分析（2）

## — 認知症共同型生活介護 —

○ 同志社大学大学院社会学研究科社会福祉学専攻博士後期課程 孫 琳 (9627)

高橋 順一 (新見公立大学・8413)、鄭 熙聖 (関東学院大学・8963)、

任 セア (立教大学・8797)、石田 慎二 (帝塚山大学・4185)

キーワード：認知症共同型生活介護、福祉サービスの質、ドナベディアン・モデル

## 1. 研究目的

認知症共同型生活介護（以下、GH とする。）のサービス評価については、2002 年度から外部評価が義務づけられており、2021 年度には介護報酬改定により、従来の外部評価機関による評価を受審するか、事業所自らがその提供するサービスの質について自己評価を行った上で運営推進会議に報告し評価を受けるかのいずれかを選択できるようになった。

「サービスの質」を評価する際に、ドナベディアン・モデルがよく用いられている。ドナベディアン・モデルは、ストラクチャー、プロセス、アウトカムの3つの側面から「サービスの質」を捉えており (Donabedian 2005)、「ストラクチャーがプロセスに影響し、プロセスがアウトカムに影響する」と指摘されている (Donabedian 2003:47)。つまり、「サービスの質」はストラクチャー、プロセス、アウトカム相互の関係性から総合的に把握されるべきであり、全体として質の良否が考えられるべきである。しかしながら、これまでの先行研究においては、「サービスの質」を捉える際に、ストラクチャー、プロセス、アウトカムの3つの側面の関係性を論じたものがなかった。

本研究では、GH の評価研究の一環として、ドナベディアン・モデルを基礎に、「介護サービス情報公表システムの事業所情報」と「提供するサービスの質の自己評価」を用い、ストラクチャーとプロセスとアウトカムの関連性を明らかにすることを目的とする。具体的には、記述統計に加え、相互の関連性ならびに各アウトカムに強く関連する変数を明らかにすることとした。

## 2. 研究の視点および方法

公表されている全国の GH における「介護サービス情報公表システムの事業所情報」と「提供するサービスの質の自己評価（サービスの成果に関する項目（アウトカム項目）」について、評価確定日直近1年間（2022年1月1日－2023年1月1日）のデータを対象とした。この際、全都道府県ごとに10%の計645事業所分のデータ（1ユニット）を無作為抽出した。抽出するデータの内容は、ドナベディアン・モデルのストラクチャーとして、法人等の種類、ユニット数、事業開始年、従業者数情報等（5年以上の介護職員の割合、常勤の介護職員数など）、プロセスとして代替的に各種加算状況、アウトカムとして提供するサービスの質の自己評価13項目（4件法）とした。統計解析は記述統計および相関分析とし、順序尺度に変換した上での相関分析も実施した。従業者数等に関しては、ユニット

数で除した値を用いた。統計処理には SPSS Statistics.ver.29 を使用した。

### 3. 倫理的配慮

本研究は既存公開データを用いた研究のため人を対象とする倫理審査は必要としない。研究遂行に際しては、一般社団法人日本社会福祉学会研究倫理規程等を遵守している。なお、本研究に関して開示すべき COI (利益相反) はない。

### 4. 研究結果

645 データにおける法人等の種類は、営利法人 341 か所 (52.9%)、社会福祉法人 (社協以外) 149 か所 (23.1%)、医療法人 103 か所 (16.0%)、NPO 法人 22 か所 (3.4%) などであった。ユニット数は 1 が 196 か所 (30.4%)、2 が 409 か所 (63.4%)、3 が 39 か所 (6.0%)、4 が 1 か所 (0.2%) であった。経験年数 5 年以上の介護職員の割合は平均 57.6% (標準偏差 23.73) であった。アウトカムとして公表されている、提供するサービスの質の自己評価では、「外出」「馴染みの人や地域の人への訪問」「地域住民や地元関係者とのつながり」の項目が記述統計において、「あまり」「全く」等で 50% 以上など不良な回答が多かった。

提供するサービスの質の自己評価 13 項目間の相関係数は表 1 の通りであった。ストラクチャー、プロセス関連の項目と、上記 13 項目における相関分析では、ユニット数や事業開始年、計画作成担当者数、常勤介護職員の経験年数、若年性認知症利用者受入加算、認知症専門ケア加算 (I)、生活機能向上連携加算 (I)、介護職員処遇改善加算 (III) 等と、提供するサービスの質の自己評価の項目の間に統計学的に有意な低い相関がみられた。

表 1. サービスの成果に関する項目間の相関係数

	[Q1]	[Q2]	[Q3]	[Q4]	[Q5]	[Q6]	[Q7]	[Q8]	[Q9]	[Q10]	[Q11]	[Q12]	[Q13]
[Q1]職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる		.220**	.427**	.475**	.176**	.270**	.443**	.416**	.164**	.180**	.419**	.451**	.402**
[Q2]利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある	.220**		.223**	.249**	.102**	.131**	.191**	.148**	.107**	.114**	.277**	.223**	.113**
[Q3]利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている	.427**	.223**		.436**	.140**	.223**	.316**	.373**	.140**	.082**	.379**	.310**	.329**
[Q4]利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている	.475**	.249**	.436**		.237**	.299**	.410**	.376**	.142**	.173**	.384**	.451**	.405**
[Q5]利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている	.176**	.102**	.140**	.237**		.090**	.179**	.156**	.418**	.288**	.209**	.204**	.179**
[Q6]利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている	.270**	.131**	.223**	.299**	.090**		.384**	.292**	0.003	0.048	.190**	.298**	.306**
[Q7]利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている	.443**	.191**	.316**	.410**	.179**	.384**		.354**	.081**	.145**	.337**	.440**	.414**
[Q8]職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることもよく聴いており、信頼関係ができています	.416**	.148**	.373**	.376**	.156**	.292**	.354**		.101**	.093**	.403**	.391**	.446**
[Q9]通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている	.164**	.107**	.140**	.142**	.418**	0.003	.081**	.101**		.404**	.199**	.127**	.104**
[Q10]運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが強がり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている	.180**	.114**	.082**	.173**	.288**	0.048	.145**	.093**	.404**		.215**	.170**	.150**
[Q11]職員は、活き活きと働いている	.419**	.277**	.379**	.384**	.209**	.190**	.337**	.403**	.199**	.215**		.429**	.420**
[Q12]職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	.451**	.223**	.310**	.451**	.204**	.298**	.440**	.391**	.127**	.170**	.429**		.619**
[Q13]職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	.402**	.113**	.329**	.405**	.179**	.306**	.414**	.446**	.104**	.150**	.420**	.619**	

\* p < .05, \*\* p < .01

### 5. 考察

「介護サービス情報公表システムの事業所情報」と「提供するサービスの質の自己評価」の関連性が一定程度明らかとなった。公表されている事項を用いた質の評価が可能であると示唆された一方で、事業所による自己評価という限界や、疑似相関への留意、プロセス指標の少なさなどの課題が垣間見えた。ドナベディアン・モデルでは質の評価において、プロセス・アウトカム指標が肝要である。これらの指標に関する利用者・職員・家族の各々の視点からの多面的な指標の設定が希求される。データが全てではないものの、記述式に限らない蓄積がエビデンスに基づく政策や支援に不可欠であると推察される。

※本研究は JSPS 科研費 22KK0024 の助成を受けたものである。